

## アスペクト研究の新しい視座としての「テイル」研究 —日本語学から一般言語学への貢献—

### 趣旨説明

庵 功雄（一橋大学）<sup>1</sup>

#### 1. はじめに

ここでは、日本語研究におけるアスペクト研究史をごく簡単に見た後、現在のアスペクト研究の標準的理解である工藤（1995）を紹介し、それと関連で本シンポジウムの各発表の位置づけについて述べる。

#### 2. 日本語学における標準的理解：工藤（1995）に至るまで

日本語研究におけるアスペクト研究は主に「動詞ーている」（以下、テイル形）の意味をめぐって展開してきた<sup>2</sup>。

テイル形には次の 2 つの基本用法がある。

- (1) 進行中 雨が降っている。太郎が本を読んでいる。
- (2) 結果残存 ドアが開いている。コップが割れている。

日本語のアスペクト研究の嚆矢と言ふべき金田一（1950）は、この 2 つの意味の違いが動詞の意味タイプの違いに由来すると考え、日本語の動詞に関する次の 4 分類を提案した。

- (3) 状態動詞：テイル形が存在しない（ex. ある、いる）
- 継続動詞：テイル形が進行中の意味になる（ex. 泣く、食べる）
- 瞬間動詞：テイル形が結果残存の意味になる（ex. 割れる、閉まる）
- 第四種の動詞：（文末では）テイル形でしか使われない（ex. そびえる、優れる）

金田一分類は Vendler(1967)に先んじる優れたものであったが、当初から、次のように、瞬間動詞でありながら進行中の解釈を持つものが存在するなど、問題点も指摘されていた。

- (4) 池の氷が少しずつ溶けている。

cf. (5) （部屋に入った瞬間の発話）あっ、氷が溶けている！

奥田（1978）は「時間」を分類の基準とする金田一の分類を批判し、「変化」の有無を基準とする次のような分類を提案した（用語は庵（2017）にしたがって改めている）。

<sup>1</sup> isaoiori@courante.plala.or.jp。なお、本「趣旨説明」および庵発表「日本語教育文法から見た「テイル」」はいずれも、科研費 18H00694（研究代表者：大津由紀雄）の研究成果の一部である。

<sup>2</sup> アスペクトにはこの他にも「～始める、～続ける、～終わる」などで表される Aktionsart に関わるものもある。テイル形で表されるアスペクトが完成相（perfective）－未完成相（imperfective）の対立に関わるものであるのに対し、Aktionsart に関わるのは出来事の局面から見たアスペクトである。

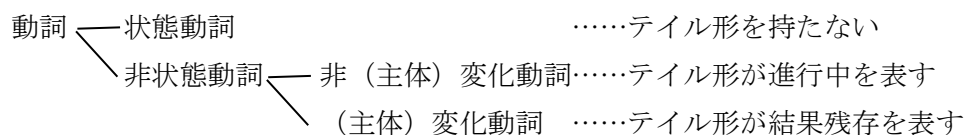


図1 動詞の分類

さらに、奥田は、テイル形はル形<sup>3</sup>との間で、未完成相 (imperfective) – 完成相 (perfective) の対立をなしていることを指摘した。

この奥田の指摘を発展させたのが工藤 (1995) であり、その体系は次の通りである。

表1 日本語のテンス・アスペクト体系 (工藤 1995、庵 2012)

テ ン ス		アスペクト	
		完成相 (perfective)	未完成相 (imperfective)
	非過去	ル形 ( - φ <sup>4</sup> - (r)u)	テイル形 ( - tei - ru)
	過去	タ形 ( - φ - ta)	テイタ形 ( - tei - ta)

表1 からわかるように、テイル形／テイタ形はル形／タ形とアスペクト的およびテンス的に対立をなしている。

日本語学のアスペクト研究における現在の標準的理解は表1 の体系であると言える。

### 3. 本シンポジウムの構成—工藤 (1995) の体系を超えて

工藤 (1995) の体系はテイル形／テイタ形をテンスとアスペクトの複合体と見るものであり、わかりやすくかつ一定の記述的妥当性も有しているが、問題点も含まれている。

このシンポジウムでは、以下の3つの観点から工藤 (1995) の問題点を指摘し、日本語のアスペクト研究の展開の可能性を指摘するとともに、その議論の一般言語学への貢献の可能性について考えたい。

#### 発表1 森山卓郎 (早稲田大学) 事態のアスペクチュアルな意味と「テイル」

「食べ始める、食べ続ける、食べ終わる」とは言え、「愛し始める、愛し続ける」とも言えるが、「\*愛し終わる」とは言えず、「居続ける」とは言えるが、「\*居始める、\*居終わる」とは言えないというように、事態にはいくつかのアスペクチュアルな類型が存在するテイル形の意味を十分に理解するには、こうした類型を分析するための手段 (時定項分析) が有効である。

<sup>3</sup> 辞書形 (終止形) およびマス形 (イ形容詞、ナ形容詞、「名詞+だ」の場合はデス形) を合わせたものをル形 (スル形) と呼ぶ (形態や品詞の名称については庵 (2017) 参照)。

<sup>4</sup> φ はそこに有形の要素が存在しないことを表す。

## 発表2 定延利之（京都大学） エビデンシャリティから見た「テイル」

テンス・アスペクトに関する研究は出尽くしたように見られているが、実際は、新たな現象の発見が続いている。それは、言語表現が状況に応じて自然さを変える様子が説の根拠として重視されだしたからである。さらに、現象の説明原理として、「テンス・アスペクトの体系」の外にも妥当する、一般性の高いものが求められるようになってきたからでもあるだろう。テイルを具体例として、このことを論じる。

## 発表3 庵 功雄（一橋大学） 日本語教育文法から見た「テイル」

工藤（1995）の体系では、テイル形／テイタ形の用法ごとの違いは重視されていないが、日本語アスペクトの習得研究からは、次のような難易度の違いが指摘されている（a→dの順で難易度が高くなる）。

- |        |         |   |
|--------|---------|---|
| (6) a. | 進行中・現在  | 易 |
| b.     | 進行中・過去  | ↑ |
| c.     | 結果残存・現在 | ↓ |
| d.     | 結果残存・過去 | 難 |

本発表では、こうした違いを、日本語学習者に対する文法教育（産出のための文法）に資することを目的とする日本語教育文法の立場から捉え、工藤の体系における「一てい一」「一る／た」がそれぞれ複数の機能を担っていると考えることによって、日本語のテンス・アスペクト体系を基本用法のみならず派生用法についても説明できることを示す。さらに、そうした捉え方をとることにより、日本語のテンス・アスペクト体系と英語のテンス・アスペクト体系との間に、形態素レベルでの高い対応関係が見られることを明らかにする。

## 指定討論者 岩本遠億（神田外語大学）

3人の発表を受け、岩本（2015）をベースに、一般言語学的な観点からコメントを行う。

## 参考文献

- 庵 功雄（2012）『新しい日本語学入門（第2版）』スリーエーネットワーク  
庵 功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版  
岩本遠億（2015）「アスペクトと事象構造の変更—結果持続の類型論に向けて—」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』開拓社  
奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって」松本泰丈編『日本語研究の方法』むぎ書房  
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15  
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房  
Vendler, Zeno(1967) “Verbs and times”, in Vendler, Zeno (ed.) *Linguistics in philosophy*.: Cornell University Press.